



JWU 子育てサイエンス・ラボが発行するニュースレター「ゆりのき」は子育てにまつわる様々なトピックやお気軽に参加できる「子育てサイエンス・カフェ」のご案内を掲載しています。以前の「ゆりのき」も[公式HP](#)で閲覧できます

=====**第12回子育てサイエンス・カフェ報告(3月18日実施)**=====

### 「4、5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーション：親の抑うつ、子どもの行動特性との関連」

今回の子育てサイエンス・カフェは、「4、5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーション」について、親の抑うつと子どもの行動特性という2つの要因との関連に焦点を当ててお話をさせていただきました。ZOOM開催ということもあり、全国の様々な地域から、また子育て中の方から専門家の方まで多様な方々がご参加くださり、ご質問や感想をいただくことができて、とても充実した時間となりました。

親の抑うつが乳幼児の発達に影響を及ぼすことが明らかになってきていますが（岡野・芹澤・李・Gunning, Murray ;2002 他）、4、5歳児以降の子どもへの影響については、あまり報告されていません。親の抑うつ得点は、子どもが4、5歳の頃から漸増するというデータもありますので、その影響を検討することは重要です。一方で、4、5歳児という年齢は、自己概念が明瞭化、統一（Angrilli, Helfat, 1981）され、他者が自分とは異なる感じ方していることが分かる「心の理論」が発達（Hogrefe et. Al., 1986）する時期でもあり、それに伴い、子どもの行動特性が明確になってきます。特に、集団の中での問題行動や情緒の統制の問題が多い子どもの場合は、親の負担が大きくなり、それが、親の抑うつ状態の要因となることも多くなります。つまり、親の抑うつからの一方向の影響ではなく、子どもの特性との相互作用を検討する必要があります。

そこで、父子、母子別々の相互作用と家族でのコミュニケーション場面を観察し、その特徴を評定した結果と、親の抑うつ、子どもの行動特性との関連を検討したところ、次のようなことが明らかになりました。

#### 遊び場面の設定

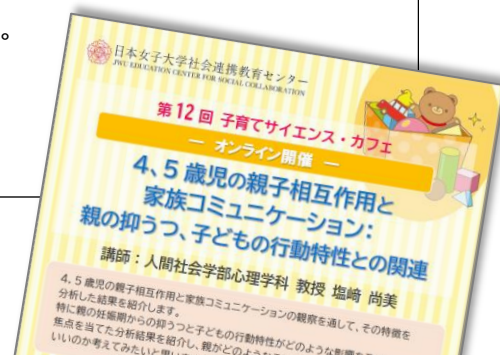
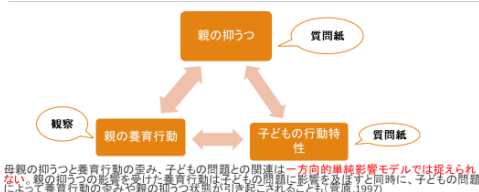
玩具

- ①ブロック(完成図見本入り)
  - ②おもちゃセット
  - ③画用紙・クレヨン・折り紙セット
  - ④種類をそれぞれ東袋に入れてテーブルに置く
- 片付け場面⇒玩具を東袋に入れて、袋の口を結んでもらう（子どもにとって少し難しい課題）



- ①親子相互作用は、共感的・情緒応答的な関わりが多い群と、教育的（何かを教えようとする）・侵入的（干渉したり、手出しする）・否定的（やっていることを否定、批判する）な関わりが多い群とに分けることができる。
- ②母親は教育的な関わりが多い群には子どもを否定する行動が多く、父親は教育的な関わりが多い群に侵入的な関わりが多い傾向がある。
- ③母親：教育・否定的関わり群の子どもに情緒統制の問題や問題行動が多い傾向がある。  
父親：教育・侵入的関わり群の子どもに情緒統制や社会性の問題が多い傾向がある。
- ④親の抑うつの影響は今回の調査では認められなかった。
- ⑤家族コミュニケーションの特徴は、親密性・柔軟性の高い群と、子どもへの批判や敵意が多い群とに分けられたが、両群間に、親の抑うつや子どもの行動特性の差は認められなかった。
- ⑥母子・父子の相互作用と家族コミュニケーションのタイプは一致しないことが多い。

#### 双方向モデルでとらえる必要



以上のことから、親子相互作用において、教育的かつ否定的な関わりや、侵入的な関わりと、子どもの情緒統制の問題や問題行動、社会性の問題との関連があることが示唆されました。これは、このような関わりが子どもの問題行動を増やしていくことも考えられますが、子どもの行動特性が親の否定的関わりや侵入的関わりを増やしている可能性もあります。そのような関わりが、今後学齢期になっても持続していくのかどうかさらなる検討が必要だと思います。一方で、子ど

もは父母それぞれと異なる相互作用や、それとはまた異なる家族でのコミュニケーションを経験することで、多様な自己像や他者との関わり方を発達させていくのではないかとすることも示唆されました。多様なコミュニケーションを経験することが、子どもの発達にとって重要であり、そのような場を意識して作っていくことが大切ではないかと思えます。

(人間社会学部心理学科 塩崎尚美)

## =====**子育て関連 卒論紹介**=====

～文京区で妊産婦・乳児を守る避難所運営に関する卒業論文を住居学科平田研究室から紹介します～

(家政学部住居学科 教授 平田 京子)

東日本大震災や熊本地震など、多くの大地震が頻発する時代に皆さんは生きています。そして小さなお子さんや若者は、生涯にわたって大地震と向き合って生きていくことになります。大地震が頻発しなくなり、静かな時間を取り戻せるのは、過去の例からみると南海トラフ地震が起こってから後となります。南海トラフ地震とは西日本を襲う巨大地震で、政府の被害想定では死者数は最悪の場合 32 万人を超えると言われています。

このような被害を少しでも減らすことが私たちに、社会に、そして日本に求められています。そこで大地震の被害がどうなるかを深く理解し、事前に準備して、災害後に迅速に復興する対策を考えておくことで、被害を大きく減らすことができるようになります。住居学科の平田研究室では、住宅やまち、社会の防災対策や防災教育、事後の生活や住居の復興力をどう高めるか、どう支援するかを研究しています。

その中でここ最近、歴代の卒論生が熱心に取り組んでいるのが、大地震が起こると文京区が日本女子大学に設置する「妊産婦・0 歳の赤ちゃんのための専用の避難所」の運営をどうするかというテーマです。



文京区では 2011 年の東日本大震災での区職員による被災地の支援経験を活かし、災害時に妊産婦や乳児が避難する母子専用の救護所（避難所）を設置することを、全国に先駆けて、地域防災計画に決めました。日本で初めての母子専用の避難所は、実際の運用経験がなかったのですが、2016 年の熊本地震の際に、文京区長から熊本市長に紹介され、熊本市内で初めて実際に設置されました。ただ住民はそのような避難所があることを事前に知らなかったため、知名度が低く、母子専用の避難所で暮らした人は限定的でした。

発生が危惧される首都直下地震が起きたら、文京区の救護所ではどんな運営がなされるのでしょうか。多数の母子が暮らす本格的な運営は、日本で初めてとなると予想されています。そこで他の自治体等からも多くの関心が集まっていますが、区が計画した備蓄物資はちゃんと地下に備蓄されているものの、運営をどうするか、どんな準備をすればよいかはまだ検討が十分ではありませんでした。そこで 2020 年度の卒論生 2 名が最初にこのテーマに取り組みました。

1 つは文京区が当初計画した妊婦 80 人、0 歳児の母子 80 組、合計 240 人が避難所に入れるのか、どのような収用計画になるのかをシミュレーションしました。ちょうどコロナで社会がストップしたのが 2020 年だったので、避難所は多数の人々が暮らすことから感染症の防止策を徹底しなければなりません。その結果、各親子の過ごすスペースの間隔（通路幅）を広くとるよう通知が出ました。



感染防止に役立つワンタッチパーティションが急ぎ 50 張り追加で納入されました。ところが卒論でのシミュレーションの結果、区の計画通りの 240 人は予定教室ではパーティションが大きく、通路が広いために、入りきらないことがわかりました。

それから救護所には区・施設（大学）・医療関係者の三者がどのような責務を果たすのかについて定めたガイドラインがあり、これについても卒論で見直しが行われ、誰が避難所に入れるのか、どう運営していくかを明確にしていきました。救護所には文京区民でなくても妊婦・0 歳児をもつ女性なら誰でも入れます。ただし誰でも受け入れてあげようとすると、定員超過となったときに区民が入れなくなるほか食料や寝床が足りなくなります。ここはジレンマなところですが、またガイドラインでは妊産婦の方々が救護所の開設準備が整うまで外で待っている、雨でも外で待機となっていました。そこで卒論では待機場所や受付の方法を次々と策定していきました。避難してきた方々をお待たせしないようにしましょう！と学生が考え、迅速な救護所の開設ができるよう「妊産婦・乳児救護所の開設キット」を初めて開発し、文京区・大学事務局と協議しながらキット内容を作成しました。救護所を設置・運営するにはライフラインが途絶する中、多くの人手が必要です。本学では大学生と協働型の運営をしよう！と、もう一人の学生がボランティア計画を練りました。



続いて、救護所を開けてからの迅速な段取りの計画に入ったのが 2021 年度の卒論。入り乱れて積み上がっていた備蓄物資を学生ボランティアと一緒に汗をかき、系統立てて整理しました。物資のグルーピング、最初に取り出すものなどの設計図を次々描いていきました。

2022 年度には 2 名が「妊産婦・乳児救護所の開設・運営キット」を本格的に完成させ、実際に日本女子大学救護所を担当する文京区職員と大学職員がペアになって、このキット通り実際に訓練し、どうしたら円滑になるかを検証していきました。救護所はいつでも人手不足。そこで東京都の帰宅困難者対策条例に定められるように、大学生が地震発生時にキャンパスにいたら、原則として 3 日間はキャンパスで寝泊まりします。その学生にも活躍してもらいたいと、大学生ボランティアの組織化を検討していきました。ボランティアはいても全体が機動的に動けるかは別。効率的な組織化を立案、多くの人に参加してもらうための動画を撮影、10 分程度の動画に編集していき、若者らしい映像作品も完成しました。今年は 3 名の卒論生が開設後の生活運営を計画し、質の高い救護所運営を模索しています。

2021 年度には子育てサイエンス・カフェでの平田による文京区の妊婦・母子を対象としたセミナーも実施しました。避難者になりたい方、救護所を支援したい方々、救護所の計画に関心のある方々も、この代々の学生が申し送りながら研究してきた、小さな一歩をどうかあたたかく見守ってください。学会での研究発表で社会還元し、熱心に研究に取り組んだものを活かして、今、社会ではばたいています。社会連携室は一貫してこれらの研究活動に参加して下さり、一緒に指導して下さっていますので、教職協働＋学生協働＋官学連携型の卒論が進行中です。今年の成果もお楽しみに。また報告していきたいと思います。





=====**次回の子育てサイエンス・カフェは!**=====



— オンライン開催 — ご自宅からお気軽にご参加ください。

## 第13回 子育てサイエンス・カフェ

### より良い子どもの遊び環境の実現に向けて —震災後の福島の子どもの遊び環境回復を事例に考える—

講師： 家政学部家政経済学科 助教 佐藤 海帆

概要： 東日本大震災・原発事故から 12 年が経過しました。そこで、震災後の福島での子どもの遊びの制限状況や環境回復に向けた取り組みを振り返りたいと思います。

いま私たちが直面しているポスト・コロナ期において、取り入れたい遊びや遊び環境づくりについて、福島の経験から一緒に考えてみませんか？

日時： 2023年6月17日(土) 13:00~14:15

申込： お申込受付後、返信メールにて Zoom 詳細をお送りします。

<https://forms.office.com/r/5D7hM3rDqB> または QR コードからお申込みください。

●参加費：無料 ●主催：日本女子大学社会連携教育センター

▼申込み



**会員募集中!**

～ 日本女子大学と「子育て」連携 しませんか ～  
子育てサイエンス・ラボ協力会員募集中!!

JWU 子育てサイエンス・ラボでは、子育てや子どもの発達に関する研究調査等を行っています。

ラボ協力会員に登録して、お子様と一緒に、本学の研究に参加しませんか？

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学外の会員様との研究、調査が開始できずにおりましたが、感染症対策を講じながら、子どものことばや見る力の発達などの調査を本格開始いたしました。

おかげさまで、調査に参加くださる会員様のご来校が続いています！

「ラボ協力会員」詳細、また新たにご登録を検討いただける方は下のリンクにてご確認ください。

[https://www.jwu.ac.jp/unv/campuslife/external/jwukosodatesciencelabo\\_top.html#00](https://www.jwu.ac.jp/unv/campuslife/external/jwukosodatesciencelabo_top.html#00)

(調査の内容・所要時間・謝金の有無等は都度担当者にご説明し、1 回ごとに協力いただけるかどうかをお尋ねいたします。)

「JWU 子育てサイエンス・ラボ」を運営する社会連携教育センターの公式 SNS アカウントです。

